

マスクをし、ラッシュを避け、手を消毒、離れて座り、窓を開け、飲み屋には寄らず、さっさと帰る。それでも、一抹の不安は残る大阪での例会。大事を取って休まれる方がいるのは当然のコロナ状況下で、この日の出席者は5人でした。欠巻による空白で、舞台はいきなり、越前から吉野、京都へ。上皇への乱暴や色恋沙汰がらみの謀叛などを織り交ぜた乱世の物語を読み進みました。

◇輪読した箇所は次の通りです。

(一) 畑六郎左衛門時能の事 (三) 鷹巣城合戦の事

豪傑憤死 (p35～38、39～46)

畑六郎左衛門時能は、元相撲人で、天下無双の万能武士。新田義貞、義助兄弟に任せ、三井寺合戦以来の戦鬪で抜群の働きを見せてきた。とくに義貞戦死後の越前での活躍は目覚ましく、足利方の越前守護斯波高経を隣国加賀へ追い落とし、南朝優勢の状況をもたらす。ところが、欠巻の第二十二巻を受けた第二十三巻に入ると、情勢は一変し、南朝方の陣地はわずかに時能が死守する鷹巣城だけ。欠巻のため、この激変がどうして起こったか全く不明で、太平記の謎となっていく。鷹巣城は、現福井市街西方の山間部に位置する山城。ここを斯波勢に包囲され、時能は約30km東方の天険、伊地知城(現勝山市)に移って抵抗するが、敵の矢が刺さったまま三日間苦しんで「吠死(ほえじに)」したと太平記は伝える。

(四) 脇屋刑部卿吉野に参らるる事

(六) 将を立つる兵法の事

脇屋義助、吉野へ (p46～48、53～54)

義貞亡き後の新田軍を率いた弟の脇屋義助は、越前を脱出、美濃、尾張を経由して吉野に入った。後村上天皇は、これまでの忠功をめで、義助の位階を上げた。洞院実世は「敗戦の責任を問うべきだ」と昇進を批判、四条隆資は「後醍醐の現地指揮官無視が原因」と、義助を弁護した。吉野朝廷の重臣間の対立を物語る。

(七) 上皇御願文の事

光厳・直義の親近 (p54～58)

足利直義が重篤に陥り、後醍醐の怨霊がうわさされた。心配した光厳上皇は、石清水八幡に願文を捧げ、

平癒を祈った。そのかいあってか、直義は回復。足利政権の統治権者と北朝の治天の君との蜜月ぶりをうかがわせた。

(八) 土岐御幸に参向し狼藉を致す事

ばさら武士、院に狼藉 (p58～65)

暦応5年(1342)8月、祖父伏見院の遠忌法要から帰る光厳上皇の一行が、樋口東洞院で笠懸を終えた土岐頼遠らの列と出くわした。下馬を求められた頼遠は怒って、院の御車に矢を放つ乱暴に及んだ。敵罰で臨もうとする足利直義に夢窓国師が命乞いをしたが、聞き入れられず、頼遠は六条河原で処刑された。頼遠は下馬を求める院の従者に「なに院というか、犬ならば射ておけ」と言い放ったといい、当時流行の「ばさら」風の好例として、しばしば引用される。

(九) 高土佐守傾城を盗まるる事

小豆島、謀叛で宮方に (p65～70)

南朝は四国工作の為、脇屋義助を伊予に下すことにしたが、敵地を避ける派遣ルート悩んでいた。そこへ、備前足利方の佐々木信胤が小豆島で謀反の旗を挙げたという知らせ。これで瀬戸内経由の航路が開けたと一同、喜び合った。それにしても、建武の乱以来、足利氏に忠節を怠らなかつた信胤がなぜ寝返ったのか。太平記によると、高土佐守師秋には本妻のほかに御妻(おさい)という愛妾がいた。師秋は伊勢守護になり、御妻も連れて赴任しようとする。しかし、別に愛人がいた浮気な御妻は、同じ御所に仕えていた老女を身代わりに輿に乗せた。これがばれて、御妻の愛人が信胤とわかる。信胤は師秋の復讐をおそれ、宮方に転じた。

第25巻輪読予定ページ(2月15日)

- 1) 119 武家の輩～122 置かる
- 2) 122 同じき～124 同じける
127 倩仏法～128 書きたりける
- 3) 128 奏状、内覧～130 事尚し
132 凡そ寺を133 申されける
- 4) 133 両儀相分～133 候ふか
141 理りなる～144 せられける
- 5) 144 將軍～146 云はく
148 詮ずる～150 書きたりける
- 6) 150 山門～152 乗られたり
153 翌日は～153 なかりけり
- 7) 157 その比～159 行きける
- 8) 159 さても～162 悲願かな